地域活性化に協力

子育てしやすいまちへ
自社施設を活動の拠点に

地域密着を掲げる都市ガス事業者は、地域の活性化に積極的に協力している。ショールームなど自社の施設を活用し、子育てしやすいまちを目指す。福島ガスは地元のNPOと協力し、ショールームを活用して子ども食堂を実施している。筑紫ガスは地域の交流拠点になる複合施設を設置。そこにはショールームも入居する。今月には保育園の運営を開始し、待機児童問題の解決に貢献する。

福島ガス

子ども食堂で楽しい調理体験を
ショールームを活用した居場所づくり

福島ガスはNPO法人ビーンズふくしま（福島市）と協力し、2021年7月からJR福島駅前のショールーム「PROME（プロメ）」（福島市栄町）3階で「駅前子ども食堂PROME」を実施している。食事に加え、ガス設備を使った調理体験、学習支援、遊びの場を提供して子どもの成長を支える活動で、開始2年で人気イベントとして定着した。子どもの送迎などで訪れる保護者が、ガス設備の利便性を体感できる機会にもつながっている。

ボランティアも多数参加

8月1日午前10時～午後1時、通算8回目の駅前子ども食堂が開かれた。事前に申し込んだ子ども16人と保護者6人が参加。10人の高校生・大学生ボランティアが運営スタッフを務めた。

運営は主催者のビーンズふくしまが担当。理事の江藤大裕氏が進行役を務めた。福島ガスはショールームの室長とスタッフ2人、営業部2人の計5人がサポートに当たった。

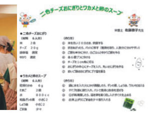
最初の1時間は勉強の時間。子どもたちはセミナールームの長テーブルやソファ席で、持参した夏休みの宿題をやり、ボランティアが手伝った。未就学児は保護者と畳スペースに座り、用意されたおもちゃなどで遊んだ。

ボランティアが勉強を手伝った

調理を体験する子どもたち

午前11時からは調理体験がスタート。初めに福島ガスの料理教室の講師を務める栄養士の佐藤徹子さんが、災害時にも役立つ知識としてガスコンロでご飯を炊く方法を紹介し、二色チーズおにぎりと、ワカメと卵のスープの作り方を説明。

栄養士の佐藤徹子さんがレシピを説明



今回の子ども食堂で使用したレシピ

その後、子どもたちはごはんの真ん中に1㌢角のチーズを入れて丸め、最後にゴマ塩をふる調理をボランティアとともに体験した。

食事のあとは遊びの時間。子どもたちはPE管とガス機器の接続具で作った輪投げなどで楽しんだ。スタッフはその間、使用した食器を洗浄。さらに滅菌処理をして片づけを終えた。

参加した保護者は「ボランティアが多く、安心して参加できた」と話した。

NPOとの補完で取り組み継続

福島ガスが子ども食堂の検討を開始したのは18年頃。当時、子ども食堂が全国的に注目され、福島市内にも少しずつでき始めていた。

そこで、将来を担う子どもたちが福島とガスを好きになるきっかけになればと、ショールームを活用した駅前子ども食堂を発案。実現に向けた検討を行う中、市内で子ども食堂を実施していたビーンズと接点ができた。

1999年設立のビーンズは20年以上にわたり、フリースクールなどの居場所づくりを通じて子ども・若者を支える活動を幅広く展開。

その一環として18年からは市の学習支援施設「福島市吉井田学習センター」（福島市仁井田）で子ども食堂「よしいだキッチン」を開いていた。

さらに、市からは子どもの居場所づくり支援事業の運営を受託。他団体が運営する子ども食堂の支援も手掛けていた。

ビーンズふくしまが福島市の事業の運営を受託して作成した「福島市子ども食堂マップ」

福島ガス 山本和徳取締役

「子ども食堂を実施したくてもノウハウがなかったが、ビーンズに運営を担ってもらい、当社が場所と食材費等の費用を提供する運営形態であれば、互いに補完関係を築きながら開催できると考えた」と山本和徳取締役営業部長は説明する。

開催に当たっては運営面だけでなく、参加者やボランティアの募集もビーンズのノウハウやネットワークを活用している。

参加者の募集に利用しているのが対話アプリ「LINE」だ。ビーンズは18年に、よしいだキッチンを開始する際、学習センターの協力を得て、近隣の小学校にチラシを配り、参加者を募集。その後は参加者や口コミなどで知った希望者にビーンズの公式LINEに登録してもらい、開催ごとにLINEで参加者を募ってきた。

駅前子ども食堂でも、この公式LINEの登録者を対象に参加者を募集。希望者は多く、募集を行うと、毎回すぐに定員に達するという。

また、ビーンズには教育や福祉、医学を学ぶ大学生や、子どもの支援に関心を持つ高校生などを中心に約100人のボランティア希望者が登録している。ボランティアを必要とするイベントがあれば登録者に連絡し、参加者を募る仕組みがあり、駅前子ども食堂でもこの仕組みを活用している。

子ども食堂の当日は江藤氏がボランティアそれぞれの専門分野や得意分野を踏まえて大まかな役割分担を決め、イベントを進める。

「社会問題等に関心を持ち、参加してくれるボランティアが多いが、やってよかったという体験を提供することを心掛けている」と江藤氏は話す。

ビーンズふくしま 江藤大裕氏

駅前子ども食堂の大きな特徴が調理体験だ。ビーンズは、よしいだキッチンで、食事と学習支援、遊びの場を提供する子ども食堂を実施してきた。

一方、福島ガスのショールームには料理教室などを開催できる調理機器が設置されていたことから、駅前子ども食堂は食事と調理体験、学習支援と遊びをコンセプトに実施することにした。

江藤氏は「福島市内で実施されている子ども食堂は43件と、この5年で急増。さまざまな形態の子ども食堂ができているが、ガスコンロやガスオーブンなどの調理機器が使える子ども食堂は少ない。火を使う調理体験は子どもたちにとって大変いい経験になる」と言う。

山本取締役は「現在、料理をする機会自体が減少している。子ども食堂では、ガスコンロやガスオーブンを使うと、こういう料理ができるんだということを子どもたちに伝えていきたい」と話す。

けがを防止するため、オーブンの扉の開け閉めや、ガスコンロの火力調整等を行う際は必ず大人と一緒に行うことを教えている。

駅前子ども食堂はこれまで年に2、3回開催してきた。企画は3～4カ月前から山本取締役と江藤氏、ショールームの室長の3人で検討。ミーティングを1、2度実施して内容を決めている。

食事・調理体験のレシピは、事前に食物アレルギーについて参加者にヒアリングした上で、全員が食べられる食材を使用している。

次回の駅前子ども食堂は12月下旬の開催を予定しており、ケーキ作り体験を企画中だ。

地域貢献が新たな価値生む

駅前子ども食堂を実施することで得た成果は何か。山本取締役はまず、ショールームの認知度向上を挙げる。

同社のショールームは駅前繁華街のビルの1階と3階にあり、1階はガス機器や住設機器の展示スペース、3階は床暖房を設置したオールガスモデルルームや調理スペースがある体験型のフロアとしている。ただ、特に3階は機器の購入検討者以外に来場者は少なく、稼働率に課題があった。

3階で駅前子ども食堂を実施したことで、多くの保護者が子どもに同行して初めてショールームを訪れた。「冬は床暖房の温かさにびっくりする参加者も少なくない。子ども食堂はガスの快適さを体験してもらえる機会にもなっている」（山本取締役）。

福島ガス 西形吉和社長

実際、駅前子ども食堂の参加者が、オール電化住宅から都市ガスに切り替え、ハイブリッド給湯器を設置した事例や、参加者の評判を元に、新たにガス衣類乾燥機を設置した事例が出てきており、ガス設備の利便性は着実に、地域の消費者に伝わっているようだ。

また、福島駅前の再開発の遅れによって周辺のにぎわいが失われている点も地域の課題となっている。

「ショールームに人を集めることで、わずかではあるが、駅前エリアににぎわいを生み出すことにも貢献できているのではと考えている」と山本取締役は言う。

同社は2023年3月に経営幹部を大幅に刷新し、新体制のもとで新規事業の開発に注力し始めた。

「子ども食堂を実施することで、新たな取り組みがこれまでにない価値を生み、これまでにない情報も得られることが分かった。こうした自信は新規事業開発を推進していく上での土台にもなっている」と山本取締役は話す。

西形吉和社長は子ども食堂について、「この取り組みを続けてくれている関係者の皆さま、社員に感謝している。街の将来を担う子どもたちには、地元にも楽しいことがあると分かってくれさえすればいいと考えている」と話す。

福島ガスは今後も継続的に子ども食堂を実施していく方針だ。

福島ガスのプロフィール
▼本社＝福島県福島市矢剣町▼設立＝1911年▼社長＝西形吉和▼供給区域＝福島県福島市▼都市ガス需要家件数＝4万4856件（2023年3月末）

筑紫ガス

地域の交流拠点を開発
子育て世代の定着を目指す

筑紫ガスが地域の交流拠点などとして段階的に開発を進めている複合施設「nodoca（のどか）」。子育て世代の女性を中心に、さまざまな年齢や属性の人々に利用される施設を目指している。2022年4月のガス棟開業に続き、今月には保育棟1階に入居する「のどか保育園」が運営を開始した。今後はガスと保育の両棟が相乗効果を発揮し、地域の活性化や生活の場としての魅力向上に大きく貢献することが期待されている。

nodoca外観

保育園の玄関サイン（右）と乳児室

nodocaは、筑紫ガスが本社を構える福岡県筑紫野市の中心部にある。JR鹿児島本線二日市駅から徒歩1分の好立地で、もともと市の上下水道庁舎があった場所だ。市は庁舎の移転に伴い跡地活用事業の公募型プロポーザルを実施。それに筑紫ガスがパートナー企業とともに応募した。

中庭を挟んでガス棟と保育棟という2階建ての建物二つで構成される。中庭は災害時に近隣住民の休憩場所などとして活用される予定だ。

かつては福岡のベッドタウンとしてにぎわっていた筑紫野市だが、若者の都市部流出などにより徐々に活気が失われていくことに危機感を持っていた。前田健之輔専務は「nodocaを通して、より子育てしやすい地域になることが若い世代をひきつけ、街の活性化につながる。飲食店などが潤い、地域が発展することで、ガス事業も拡大できる」と説明する。長期的視点でのガス事業への好影響を期待している。

保育棟はその名の通り、1階に保育園が入居する。待機児童が多いことは筑紫野市が抱える主要課題で、20年策定の第6次総合計画でも保育サービス充実の取り組みが重点事業の一つとして盛り込まれていた。

保育園は待機児童問題の解消に寄与する。また、筑紫ガスの福利厚生の向上にも貢献すると期待される。同社にも乳幼児を抱える社員は常に一定数存在し、彼らが仕事と子育てを両立できる環境の整備は課題だったからだ。

スタッフは地元で雇用

のどか保育園の対象は0～2歳児で、定員は19人。保育園の立ち上げは筑紫ガスにとってもちろん初めての経験だった。保育棟全体の開設準備を担当した営業企画グループの石橋智康課長は「0～2歳の各年齢の保育に必要な保育士の人数や部屋の広さなど、保育の基本を知るところから始まった」と振り返る。

石橋智康課長

園の運営は、保育関連事業を幅広く手掛ける紬（山口県下関市）に委託した。同社は五感を育てる教育という理念のもと食育に力を入れており、園児の給食やおやつには化学調味料を使用しない方針を掲げる。のどか保育園もこうした取り組みをならっており、カリキュラムの柱のひとつに食育を据えている。

園児の給食は全て保育棟2階の半分のスペースに置かれたセントラルキッチンで調理する。そのため、保育士だけでなく、調理師や管理栄養士の資格を持つスタッフも地元で雇用した。

スタッフは非常勤の園長を含めて全て女性で、総勢10人ほどだ。建物の内装工事と並行して、彼女たちの研修を行うなど準備作業を進め、9月の開園に至った。石橋課長は「開園当初から預かる園児は7人で、年度内には倍くらいに増える予定だ。開園後の施設見学などで入園希望者がさらに出てくると期待している」と話す。

ガス棟1階のイベントスペース

子育て世代中心で憩いの場に

先行して22年4月に開業したガス棟には、1階にイベントスペースとカフェ、2階にガス機器のショールームが入居する。ガスコンロなど調理器具が常備されたイベントスペースは筑紫ガス主催の料理教室で使用するほか、市民団体などに貸し出している。

立地条件の良い場所に本格的なショールームや料理教室を開催できる場所を持つことは、以前からの経営課題だった。従来は本社内にガス機器の展示エリアを設けていたが、顧客にとって利便性が良い場所とは言えなかった。料理教室は、本社よりも市の中心からさらに離れた永岡工場（都市ガス製造工場）内で開催しており、同様に足を運びにくい場所にあった。

前田健之輔専務（右）と黒川元博取締役

ショールームとイベントスペースが同じ建物にあることの効果も生まれている。ガス棟の責任者である営業推進部の山下睦夫課長は「ショールームでガスコンロを見て、温め直しなどの機能に興味を持ったお客さまに対して、イベントスペースに置かれたガスコンロですぐに実演して機能をお見せすることも機動的にできるようになった」と説明する。子育て世帯に人気の衣類乾燥機「乾太くん」も2階に実演機を置いており、自宅の洗濯物を持ち込んで効果を試すことも可能だという。

山下睦夫課長

保育棟とガス棟の相乗効果

ガス棟と保育棟との連携は開園前から始まっている。7月にはのどか保育園主催で「おんぶde離乳食教室」という催しがイベントスペースで開かれた。参加者は保育園の管理栄養士のアドバイスのもと、旬の食材を取り入れた離乳食を作った。教室開催中は、保育士が参加者の子どもの面倒を見ていた。

子どもや親子を対象にした料理教室などのイベントはほかにも多く企画されている。地元の市民団体が主催する子ども食堂も定期的に開かれており、市長や市議会議員が見学に訪れるなど地域の関心は高い。

カフェもオープン以来、近隣住民の憩いの場としてにぎわっている。山下課長は「子育て世代の女性が中心だが、年配の方も多い。窓際のカウンター席はビジネスマンがよく利用される。カフェで知り合ったお客さまが料理教室などのイベントに一緒に参加されたケースもある」と話す。カフェの集客に関しては地元の筑紫女学園大学とも連携し、学生がメニュー開発などで協力している。

自治体同士の交流も

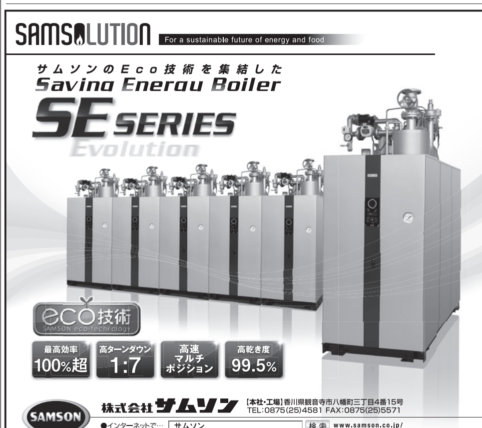
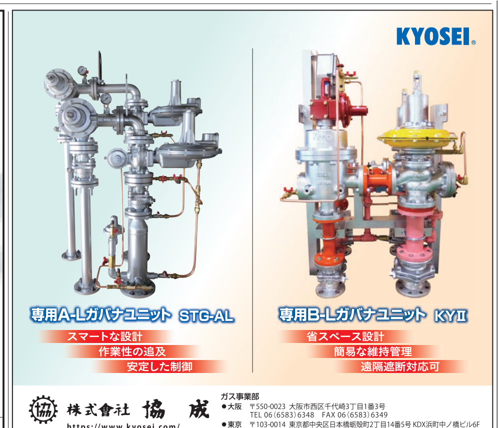
nodocaの滑り出しは好調だ。キャンドルナイトやクリスマスなど季節のイベントも盛況で、ガス棟の初年度の来場者数は当初目標の3千人を大きく上回る1万5千人を記録した。

前田専務は「地元企業の経営者などからも、良い施設を作ってくれたという声をいただいている。街のシンボルになりつつある」と手応えを感じている。

今後は筑紫野市だけでなく、太宰府市や小郡市など筑紫ガスのガス供給エリア全体で、市民や企業の交流拠点としての機能も強めていきたいという。地域社会の活気を取り戻すことは、福岡市のベッドタウンとして成長してきたこれらの自治体に共通する課題だからだ。

黒川元博営業統括本部長は「このエリアには太宰府天満宮という観光スポットもあるが、近年は地域内に人が滞留せず、素通りする場所になりつつある。供給エリア内の自治体が交流することで、地域に埋もれている魅力を掘り出し、多くの人に認知してもらえる活動につなげたい」と話す。

そのための拠点として、nodocaの複合施設としての魅力をさらに高めていく。例えば、カフェの一角に設けられたアロマキャンドルや地元産の生活雑貨などの展示・販売コーナーは一層充実させる。また、保育棟の2階も半分のスペースは地元の物産を扱う店や総菜販売の店などにテナントとして貸し出すことも検討している。

筑紫ガスのプロフィール
▼本社＝福岡県筑紫野市紫▼ガス供給開始＝1965年▼社長＝前田健吾▼供給区域＝筑紫野市、太宰府市、小郡市、基山町、筑前町▼需要家件数＝約4万1千件（2022年度）

日本ガス協会のページに関するお問い合わせは広報グループ、鈴木（☎03・3502・0112）まで。